

【卒業生寄稿】

ポルトガル語学科で学んだ知見の「活用」

西脇靖洋

(静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科准教授)

私は子供の頃から歴史が好きで、高校生の時点でも歴史学を専攻することができる学部・学科への進学を志望していました。上智大学外国語学部ポルトガル語学科への入学を決意したのも、日本とも密接な関連性を有しているポルトガルの歴史について学びたいと考えたためです。入学後、学科内にはブラジルやポルトガル語そのものに興味を抱く学生は散見されたものの、ポルトガル（特に歴史）に関心を持つ同輩の数がごく僅かであったことには少々驚きました。

私が在籍していた当時、要求される学習量の多さなどから、ポルトガル語学科は卒業するのが困難な学科の一つとみなされていました。しかし、上記のように比較的明瞭な動機を持っていたことから、大学入学後、ポルトガル語や他の科目の学習において大きく躓くことはありませんでした。大学3年時にはポルトガルにある協定校（カトリック大学）に交換留学し、現地においてポルトガル史やポルトガル語についての知見を深める機会を得ました。

ポルトガル語学科を卒業後、私はかねてからの計画どおり大学院に進学し、職業研究者となることを志向しました。大学に入学した当初、ポルトガルの歴史のなかで最も関心を抱いていたのは、15世紀に端を発する「海外進出」についてでした。ところが、大学で学びを進めていくうちに、同国の現代史へと興味が移行しました。20世紀後半以降のポルトガルの歴史については、日本はもちろん、ポルトガル本国においても十分に研究されているとは言えない状況であったことから、自ら調査を実施することにより解明したいと考えたのです。したがって、大学院ではポルトガルの現代政治外交史に関する研究を進めることとしました。

それから10年以上経過したのち、私は山口県にある大学に専任教員として着任しました。その間も私の研究関心はさらに変化し、主専攻も歴史学ではなく、国際関係論へと移行していました。しかし、ポルトガル史に対する関心そのものは今日に至るまで続いており、国際関係論という枠組みのなかでポルトガル史（近年の政治経済情勢を含む）に関する研究や教育を実践しています。2020年度に現在の本務校である静岡文化芸術大学に移籍した際には、ポルトガル語に関する教育にも携わることができるようになりました。さらに2022年度には、母校である上智大学外国語学部ポルトガル語学科においても、非常勤講師としてポルトガル語関連科目を担当する予定です。

ポルトガル語学科に限らず、人文・社会科学系の学部・学科においては、大学卒業後に研究職を目指す人々の割合はさほど高くありません。その意味においては、私のこれまでの経験は現役のポルトガル語学科の学生（在学生および新入生）の大部分にとり、あまり示唆に富むものではないかもしれません。

しかしながら、在学中に努力し、獲得したポルトガル語やポルトガル史に関する知識が礎石となり、現在、自分自身が望んでいた職に就いているという事実に着目すると、必ずしも無関係という訳ではないようにも思われます。もしポルトガル語やポルトガル語圏諸国の何かしらに対して向学心が湧いた場合には、ぜひ真摯に取り組んでみることをお勧めします。興味そのものが変容するかもしれませんが、即座には期待通りの成果は得られないかもしれませんが、努力したこと自体は何らかの形で還元されるのではないかと考えます。